The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ペーター・ラインハルト・グライヒマン, 「そもそも何のために私は生きてきたのか」 ノルベルト・エリアス(1897年6月22日-1990年8月1日) |
| Author(s) | 宮田, 敦子 |
| Citation | 年報人間科学. 1999, 20-1, p. 247-255 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/6377 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ペーター・ラインハルト・グライヒマン

# 「そもそも何のために私は生きてきたのか」

ノルベルト・エリアス
一八九七年六月二二日―一九九〇年八月一日

宮田敦子　訳

エリアスは齢七九を数えた時、ドイツ語圏で、そしてまた間もなく他の言語圏でも、かなり多くの読者公衆に知られ始めた。九三歳の誕生日の直後にアムステルダムで亡くなったが、彼は生涯の最終段階でもまだ学術的著作を書き続けていた。ヨーロッパの多くの国々の大新聞やテレビは、彼が好んで »Menschenwissenschaft（人間科学）«[1] と訳した »sciences humaines« の分野における彼の業績を讃えた。一地方のローカルなメディアでさえ、彼に優れた追悼の辞を捧げた。彼の研究に対しては既にかなり以前から学術的な評価がなされていた。ヨハン・グーズブロームは、ヨーロッパの様々な国で彼の著作が遅まきながらゆっくりと受け入れられ、批評された様子を初めて体系的に記述し、[2] ヘルマン・コルテは伝記的な事実を明かにした。[3] 私も一九八七年の『ケルン社会学誌』に、特にドイツ語圏の学者達の反響について略述しておいた。[4] そこでここでは幾つかの個人的な思い出を書き留めてみたいと思う。

六〇歳代も終わり頃のエリアスと知り合った人は、彼が小柄で、とてもきびきびした、どの訪問者をも注意深く見つめる、非常に強い情熱をもった学者であることに気づいたはずである。当たり前のことだが、彼は他の人の言葉に耳を傾けることができたし、暖かい態度で他の人に接する能力を持っていた。年金暮らしの「講師」、例えば員外教授として、彼は一九六二年以降イギリスのレスター大学社会学部でさらに研究を続けていた。一九七一年、私はそこの客員講師になり、経験的研究について「所員達の研究会」で、つまり研究所の講師達を前に講演をすることになった。どの人も好意的な論評をしてくれた――ただエリアスだけは黙ってそばに座っていたが、とうとうディスカッションの最後の最後に激しく情熱的に、私の発表のすべてを全く不充分だとして拒否したのである。このようにし

て彼と私の間は始まった。他の人々にとっては、こうした反応はもうずっと前からお馴染みのものであった。その反面、彼は愛情に満ちた思いやりのあるホストでもあった。例えば、彼は私達や子供達に、ガーナの大学[1]にいた時に手に入れたアフリカの木彫品[5]について説明してくれた。七〇歳代半ばに彼は初めてハノーファー大学の社会学者達を前に講演をしたことがあるが、その時は一番大きな講義室が超満員になった。最前列にいる教授達は非常に遠慮がちだったが、まず講義室の後ろの方からオスカー・ネークトが出てきて演壇に立ち、演台をつかんだ。彼は一時間にわたって自分の視点から、エリアスの発表したことすべてについて縷々解説を加えた。白髪のエリアスはその間じゅう黙ってそばに立っていた。後で彼はいたずらっぽくこう述べている。「ネークトのやつは私を私の生産手段から切り離そうとした。」[11]

国際的に知られつつある学者が、あれほど情熱的に自分の詩を公にしようと奮闘するのはなぜなのか？[6]詩を書く人というのは、言葉に愛情を持っているものだ、とウルリッヒ・ベックは『シュピーゲル』誌一九九〇年八月六日号の中の追悼文で述べている。[7]確かに学問的な仕事と芸術的な仕事を結びつけることをまだ教育および人生の理想とするような、教養や学識の伝統の中で育った彼のような人は、芸術の分野でもまた自分の才能の試作品を披露するチャンスを見逃さない、という風にも見れるかも知れない。が、しかし、違うのだ。彼の衝動はそれとは別のものだった。彼は、我々におそるおそる詩を見せるたびに、友人達が懐疑的な態度を取るのを知っていた。しかし今になって分かったことだが、彼が我々に見せたのは、大抵は彼にとってそれほど重要でない詩だったのだ。詩のための突破口ができたのは、メルジーヌ・フスの援助のお陰であった。彼女はフランクフルト大学近くの彼女の「古い店」の中、つまりボッケンハイマー書店の中の一角を朗読会に提供してくれた。そこにエリアスは八二歳の誕生日に人々を招待したのである。数人の懐疑的な友人達もその時説得されて遠方からやって来た。最前列には彼の本の出版社の社長、ジークフリート・ウンゼルト[三]と、フランクフルト市役所の文化局長のホフマン[四]が座っていた。エリアスは「彼の詩と翻案の一部を朗読した。」[8]朗読につれて、緊張が高まっていった。その時、一枚の原稿がタイミングよく落ちたので、彼は中休みを求めたのだった。それからその「詩」が出版されるまで、なお八年が経過することになった。懐疑家達のバリアがゆっくりと解かれた。幾つかの「技術的な前置き」をエリアスは朗読の前に置いた。つまり「……人から当然疑問に思われるだろうし、私も場合によってはあなた達にいくらか釈明をする義務があるかも知れない、と感じていることがあります。つまり、どうして社会学者として知られている者が、今また詩を作ることになったのか？ということです。それに対して私は、一生の間を通じて詩作は、要するに私の学問的な行為の間隙を非常に快く補う役をしてくれた、と言いたいのです。詩作というのは、学問的な仕事に対して確かな利点があるのです。なぜなら、学問的には人は実際なんと言ってもいつもただいわば一つの鍵盤を通じてしか人々と意思を疎通させられないのです

が、詩をもってすれば人は意識および――もしあなた方がそう望まれるなら――無意識の多くの層の上で、互いに意思を疎通し合えるのですから。……詩の場合は、言葉の持つ音楽が思想と同じように大切なのです。そして、詩はまさに音楽と思想を結びつけることができるのですが、これは純粋な音楽にはできないのです。そして、それゆえに詩のそういうところが私にとって常に魅力に満ちていたのです……しかし、それは必ずしもうまくは行きませんでした。詩はいわば意識の様々な層を通して書かれるというまさにそのために、実際フロイト流に言ってよければ、無意識的なものが予想もしない働き方をすることがよくあるのです。人はフロイトが元来考慮に入れなかった無意識なるものに行き着くのです。……」[9] 常に世の中の方向づけの学問的手段のために奮闘してきたエリアスは、ここでもまたその限界をはっきり表現し、いかに彼自身が――いかに一人の人間が、いつも自分自身の感情、気持、情熱、苦悩、そして無意識の衝動についても話し合いたいと思っているか、また話し合わねばならないか、を明らかにしている。そうすることへの彼自身の欲求を彼は様々な詩やそれについてのコメントの中で告白した。だから彼は私が朗読を録音することをいつも強く要求するのだった。

結局八年後の印刷された詩版では、彼はもっと意識的に自己制御をしていて、もはや告白を漏らすことはない。残っているのは深い悲しみ、喜び、情熱、苦痛、性的欲求不満からくる個人的な叫び声、そしてとりわけ迫害、亡命、[10] 孤独、中でもアウシュヴィッツでの母の死[11]についての、精神的外傷となった不安からくる、個人的な叫び声の最も普遍妥当的な形式だけである。彼の著作『文明化の過程』[10] 以来一一年間、彼はなにも出版していない。それからさらに「年金つき退職」をするまでの一二年間に論文が三つである。この段階で彼は「そもそも何のために私は生きてきたのか?」[11] という懐疑的な問いを自分に投げかけた。

しかしその後、だんだん公に認められ、精神的外傷が徐々に解消されるにつれて、彼はもう決してその疑問を立てなくなった。今や彼は「二〇世紀における否定的ユートピア像の増大」の中に「部分的に、恐怖と不安の雰囲気の反映を非常に確かに」見るようになり、現実の悲惨さを前にして、トーマス・モア以来の、かつてのユートピア像を「空想的願望像」と名づけている。あの願望像が徐々に実現可能になる動きの中で、人々は自分がますます他の人々に委ねられているのを発見し、互いに恐がり合っている。とりわけそれゆえに二〇世紀の否定的ユートピア像というのは主として「恐怖のユートピア像」[12] なのである。それに対してエリアスは個人的には、はっきりした楽観的な姿勢を強調した。先の懐疑的な自己疑念に対して、彼はそれ以来誰にも分かる沢山の答えを明確に表現している。「死にゆく者の孤独について」、自分を常に現代の不可知論者とみなしているエリアスは、次のように書いている。「人間同士がどれほど深くお互いに依存しあっているかを理解することは、今日でもまだやさしいことではない。一人の人間のすべての行為の意味は、彼が他の人々のために、しかも現在いる人々のためばかりではなく、これから生まれてくる人々のためにも、どんな価値を持つ存在である

のか、ということにかかっている。つまり幾世代にもわたる人間社会の進展にかかっているのである。このことは確かに人間の様々な基本的相互依存関係の一つなのである。」あるいは結局のところ、一人の人間から生まれて「ずっと生き続けてゆくものは、一人の人間が他の人々に与えたものであり、彼らの記憶の中に残っているものなのである。」[13]

エリアスの主要業績の本質は、人間の総合形成能力の発展理論を作ったことであり、それを歴史的に実例をもって証明したことにある。[14]歴史哲学的な伝統は完全に捨てていた。彼のこれに関する最も優れた仕事である、時間および象徴理論[15]はまだ殆ど受容されていない。とはいえ、彼は、断片的な事柄をより一般的な全体へつなぎ合わせる独特の能力があることを、生涯を通じてあらゆる機会に人々に分からせてくれたのである。

エリアスはまた、自分とは極めてはっきりと距離を置きながら、他の人々の社会的状況に感情移入する名人であった。そのために、本当のところは彼と無縁な人々と直接に対話することが彼にはできた。歴史家達の会議の後で、一聴衆であったある伯爵夫人がエリアスのために、会議参加者全員を彼女のお城での華麗な夜会に招待したことがある。お城へ向かう途中で、エリアスは彼女にこのような言い方をしたことがある。「私の本をご覧になって、きっと貴女は私が貴女と同じように貴族の出身だと思われていることかも知れませんが、会ってみたらチビで年寄りのユダヤ人だということで、がっかりしておられるのではないでしょうか？」――子供や青少年に対して彼が特別な理解力を持つのは、昔のロンドン亡命時の長い集団療法体験[16]のゆえだけでなく、彼自身生涯にわたって持ち続けた若々しさによるものである。一九七九年七月のベルリンでの「国際児童年」に際して行われた「両親の行儀をよくするために」という、時間のかかる教育活動についての講演で彼が鋭く批判しているのは、今よりもっと大きかった昔の「両親と子供達の間の力の差」である。この差があるがゆえに、両親や教師達はこの差をしばしば自慰的な空想の中で、子供達を性的に押さえつけるために利用し尽くしてきたのである。[17]ある日曜の朝、つまり一九八二年一二月二〇日、彼は超満員の「パラディソ」という青少年センター、つまりアムステルダム中心部の非常に大きな古い教会堂でこれと似た問題を論じた。世界的に名の通った八五歳の学者が、何時間にもわたって、魅了された青少年と討論しているのをかつて見た人があっただろうか？彼は忍耐強く相次ぐ質問に答えている。ただ、世紀の変わり目頃、裕福な家庭の子供は彼自身のように、どんなに異性に対して極端に「守られて」育ったかということを、彼が自分自身を例にして示そうとした時だけは、あの過去の時代がどういうものであったかを想像するのが、彼ら青少年には困難であった。

エリアスは最後の数日に到るまで、いつでもどこでも信じられないほど生き生きと頭がさえていて見事に的確な表現力を持っていた。テレビやラジオの数え切れないインタヴューはこの才能を証明している。この才能を容赦なく有効に活用したのはマス・メディアだが、利益を得たのはひとりメディアだけではなかった。一九八〇年五月

七日から五月一〇日の間に、例えば彼はウィーンで二つの異なった講演をし、別のテーマについてさらに二つのゼミで話をし、その合間にテレビのインタヴューを一つ、記者会見を一つ、そしてラジオ放送のインタヴューを二つこなしている。スタジオにやって来ると、彼は煩わしい衣服を脱ぎ捨てるかのようにそれまでの立て込んだ日程を頭から捨て去るようだ。ちょっと落ち着くために数分の時間をもらって、部屋の一隅でじっとしている。そしてたちどころに生き生きした様子を取り戻すのである。あるいは一九七九年三月六日には、彼は西ドイツ第三ラジオ放送で「モーツァルトをより良く理解する試み」を講演するように頼まれた。その後で彼は私に電話をしてきた。そこで、彼が原稿を作ってきたのかを私が尋ねると、彼はこう答えたものである。「いや、ラジオ局の係の人は私に、三〇分で話をしてくれ、と言っただけだ。」と。実際彼の話は正確に二九分で終っている。『タッツ』紙[18]はこの講演を一九九〇年八月四日に掲載した。どうして彼は自分をそんなにモーツァルトと一体化するのだろうか？彼が言うには「自分は、天才、即ち芸術家モーツァルトと人間モーツァルトをいわば二つの異なった部屋に閉じ込めることに、気持の上で違和感がある。……それがそもそもの問題だったのです。……」そしてこれはまた彼自身の問題でもあった。[19]彼自身決してただ単に「専門家」として見られるのを望まなかった。私は彼に、彼がモーツァルトにことよせて、まさに自分自身の特徴を描いていることに気づいていたのかどうか、と尋ねた。「いや」と彼はそっけなくはねつけた。「一体なんでそんなこと考えるのかね？」彼自身、政治的な亡命難民として、フランスからオランダを経てイギリスに流れていった時期の一九三五年、彼が書いた初期のある学術論文の主題は「フランスからのユグノー派の追放」であった。[20]後にテーマの選択と自身の運命のつながりの可能性について尋ねられるたびに、彼は常にそれをきっぱりと否定している。しかし、エリアスは自分より若い者達から研究テーマについて助言を求められると、「書物」によるのとは別に、テーマを選ぶに至った別の道があったのかどうかを、いつも諭すように尋ねた。少なくともそれについて何か自分自身が体験したことがあるかどうかを。「お前の書物は／書物に過ぎない／薄布貫く視線に過ぎない／まだ／まだ生には達していない／……」と彼は作詩している。[21]

多くの人々が、今やエリアスを「今世紀最大の社会学者の一人」と呼んでいる――例えば、一九九〇年八月一〇日の『ツァイト』紙で、U・グライナーがそう名づけている。[22]エリアス自身は、一生涯自分をアウトサイダー[23]と理解していた。長い生涯を通じて、国家形成の過程を探求した彼は、ドイツの国家および政党とは関わりを持たないままであった。常に社会組織と国家社会の比較を人にも求め、自らも実践した彼は、一時的に身を置いて生きる社会に対して距離を保っていた。例えば、オランダや連邦共和国、フランスやイタリアで最高の勲章や賞を貰っても、彼の姿勢はなんら変わることはなかった。彼の仕事が狭い意味で貢献している[24]――社会学、心理学、歴史学、そしてまた哲学といった――あのいわゆる「専門」中心のアカデミックでプロフェッショナルな学問的作業に対して、

そして特に大学の学問的作業に対して、彼はきっぱりと一線を画していた。上に行くこと、プロになることを目指す、若いドイツの教授達の多数は、彼らの方で距離を置いていた。彼らは仲間内だけに通じるような、精巧かつ高度に発達した専門用語で自分の考えを表現するのを好んだ。これに対してエリアスは簡潔に一般に分かるように話した。これが、彼が最も若い学生達にも魅力を放ち続けた理由である。そしてこのために、この八〇歳を過ぎた学者の話を聞こうとする人々で――若手の教員達がやっかみ半分驚いたことには――何週間にもわたって、例えばビーレフェルト大学やボッフム大学、フランクフルト大学の大教室が満員になったのである。また一九四五年以降、ドイツ社会学内部で、理論ごとに、方法ごとに、あるいは個人を中心にお互いに干渉しあわない形で各地域に自然発生的に「学派」なるものに対しても、彼は距離をとり続けた。それらの学派のうちの多くから、彼の思想は「亡命から生まれた社会学」[25]と思われている。学問にはいかなる国境もないとは本当だろうか？例えば、パリやイタリアや、とりわけオランダでエリアスが熱狂的に受容されたことは、かつて亡命したエリアス本人がドイツ人に対してこのように距離をとっていることとも関係している。それらの地では彼は最も優れた研究者によって受け入れられている。そして何よりも彼の理論は、それぞれ固有のやり方で応用され、さらに発展させられているのである。[26] そこではエリアスは、ドイツの最良の社会科学的思考の体現者かつ総括者と見られている。彼ならば問題なく受け入れることができる。なぜならば彼はナチス・ドイツ国家およびその協力者達をいっさい気にとめずに仕事を続けた人だからである。

常にきわめて決然とした希望を表すことが、エリアスの姿勢と思考の特徴である。一九九〇年一月四日、長い会話の後で、今丁度なにに取り組んでいるのか、と彼に尋ねられ、私がポーランドとその歴史だ、と答えると、ブレスラウで生まれた彼は、自然にポーランド語で「ポーランドはまだ失われてはいない……」という詩句を語り始めた。二〇年間まだ一度も私は、彼からポーランド語を聞いたことがなかった。しかし、この不屈の希望はまた彼の人生の格言でもあった。一度も彼は自分自身の人生を哀れっぽく、自己憐憫をもって見つめることはなかった。ただ亡命中に作った「哀れなヤコブのバラード」の中で、彼は「二人はいっしょに／哀れなヤコブに殴りかかった」というコーラスを絶えず繰り返させている。そしてもっと頻繁に、「彼は相変わらずお金を持たずに／世界の中をさらにさすらい続けている」[27]と繰り返させている。現実の彼の金銭問題は、ヘッセン州の文部大臣ルートヴィヒ・フォン・フリーデブルクの尽力のお陰で、連邦補償法できちんと片づけられている。しかし、彼の故郷はどこだろう？ドイツの中の揺るがぬ地、親しみのある地はどこだろう？彼はそれを探し求めていた。私はフランクフルトの植物園であるパルメンガルテンで、大学側とオペラ劇場側の入口の間を彼と長い間行ったり来たり散歩したのを思い出す。彼はユダヤ人のホテルに住んでいた。しかし、彼はもはやどこにも、馴染みと感じられるような、あるいは、くつろげると感じられるような場所

を見つけることができなかった。そこで彼は、時が経つうちにもっと馴染みができたアムステルダムの人々の間に戻って、最後の数年間を過ごした。その地から、彼は批判的に、しかし、暖かく『ドイツ人について』[23]を書いたのだった。

［原注］

(1) N. Elias, Was ist Soziologie? München 1970[1]. N. Elias, Engagement und Distanzierung. Arbeiten zur Wissenssoziologie I. hrsg. u. übersetzt von M. Schröter, Frankfurt a. M. 1983[1].

(2) J. Goudsblom, Aufnahme und Kritik der Arbeiten von Norbert Elias in England, Deutschland, den Niederlanden und Frankreich, Bibliographie, S. 17-100, in: P. R. Gleichmann / J. Goudsblom / H. Korte (Hrsg.), Materialien zu Norbert Elias' Zivilisationstheorie, Frankfurt a. M. 1979[1]; ders., Aufnahme und Kritik der Arbeiten von Norbert Elias, Kurze Ergänzung der Rezeptionsgeschichte, Bibliographie, S. 305-322, in: P. R. Gleichmann / J. Goudsblom / H. Korte (Hrsg.), Macht und Zivilisation, Frankfurt a. M. 1984. — J. Goudsblom, De sociologie van Norbert Elias, Amsterdam 1987.

(3) H. Korte, Über Norbert Elias, Frankfurt a. M. 1988.

(4) P. R. Gleichmann, Aus Anlaß seines 90. Geburtstages, S. 406-416, in: Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, 1987, H. 2. — W. Engler, Zivilisiert? Norbert Elias nachträglich zum Neunzigsten, S. 391-406; in: Sinn und Form, 40 / 1988, S. 2.

(5) African Art (Ausstellungskatalog der Sammlung von N. Elias) 14. April - 14. Juni 1970; Leicester Museum of Art / England.

(6) Norbert Elias, Los der Menschen, Gedichte. Nachdichtungen, Frankfurt a. M. 1987.

(7) U. Beck zum Tod des Soziologen Norbert Elias, in: Der Spiegel vom 6. 8. 1990 Nr. 32 S. 168.

(8) »Norbert Elias liest aus seinen Gedichten und Nachdichtungen bei uns am Freitag, den 22. 6. 1979 um 20 Uhr«. — (Text der Einladung von Melusine Huss. Frankfurt a. M.).

(9) »Norbert Elias liest bei uns ... am ... 22. 6. 1979«— Tonbandnachschrift vom 27. 6. bis 1. 7. 79; P. R. Gleichmann; im Ms., 32 Seiten; S. 1 ff.

(10) N. Elias, Über den Prozeß der Zivilisation, (1939) Frankfurt a. M. 1976; 2 Bds.

(11) N. Elias, Los der Menschen, Frankf. a. M. 1987, S. 80 を参照のこと。

(12) N. Elias, Thomas Morus' Staatskritik, mit Überlegungen zur Bestimmung des Begriffs Utopie, S. 101-150, in: W. Voßkamp, Hrsg., Utopieforschung, Interdisziplinäre Studien zur neuzeitlichen Utopie (3 Bde.), Stuttgart (J. B. Metzler) 1982; Bd. 2, S. 146 ff.

(13) N. Elias, Über die Einsamkeit der Sterbenden in unseren Tagen, Frankfurt a. M., 1982[1]; S. 54 und S. 100.

(14) N. Elias, Über die Zeit, Arbeiten zur Wissenssoziologie II, hrsg. von M. Schröter, Frankfurt a. M. (aus d. Englischen von H. Fließbach und M. Schröter) 1984[1].

(15) N. Elias, The Symbol Theory, An Introduction, in : Theory,

Culture & Society, London (SAGE) vol. 6, no. 2, May 1989, S. 163-217; vol. 6, no. 3, August 1989, S. 339-383; vol. 6, November 1989, S. 499-537.

(16) N. Elias, Die höfische Gesellschaft, Untersuchungen zur Soziologie des Königtums und der höfischen Aristokratie, Neuwied 1969[1]; Tb.-Ausgabe: Frankfurt a. M. 1983[1].

(17) N. Elias, Die Zivilisierung der Eltern, S. 11-28, in: »... und wie wohnst Du?« Hrsg. Linde Burkhardt, für die Regionale Kommission für das Internationale Jahr des Kindes im Auftrag des Internationalen Design Zentrum Berlin (IDZ Berlin) 1980.

(18) »Mozart war kein Revolutionär« (wörtliche Niederschrift des von Elias im Westdt. Rundfunk frei gehaltenen Vortrages) in: »die tageszeitung« (TAZ Hamburg) vom 4. 8. 1990, S. 14.

(19) N. Elias, Mozart, Zur Soziologie eines Genies, hrsg. von M. Schröter, Frankfurt a. M. 1991; Bibliothek Suhrkamp.

(20) N. Elias, Die Vertreibung der Hugenotten aus Frankreich, S. 369-376, in: Der Ausweg (Paris) 1 / 1935, S. 12.

(21) N. Elias, Los der Menschen, Frankfurt a. M. 1987, S. 67.

(22) U. Greiner, Norbert Elias, Zum Tode eines großen Soziologen, in: Die Zeit vom 10. 8. 1990, Nr. 33, S. 36.

(23) Norbert Elias über sich selbst, Ein biographisches Interview von A. J. Heerma / A. van Stolk / N. Elias, Notizen zum Lebenslauf, Frankfurt a. M. 1989.

(24) N. Elias, Soziologie und Geschichtswissenschaft, Einleitung zu: Ders., Die höf. Gesellschaft, Neuwied 1969, S. 9-59; W. Engler, Norbert Elias als Wissenschaftstheoretiker, in: Deutsche Zeitschrift für Philosophie 35. 1987. 8, S. 739-745; P. R. Gleichmann, Zur Historisch-Soziologischen Psychologie von Norbert Elias, S. 451-462, in: G. Jüttemann (Hrsg.), Wegbereiter der Historischen Psychologie, München-Weinheim 1988.

(25) K. -S. Rehberg, Form und Prozeß, Zu den katalysatorischen Wirkungen einer Soziologie aus dem Exil, S. 101-169, in: P. R. Gleichmann / J. Goudsblom / H. Korte, Hrsg., Materialien zu N. E., Frankfurt a. M. 1979.

(26) A. de Swaan, In the Care of the State, Health Care, Education and Welfare in Europe and the USA in the Modern Era. Oxford 1988 (dt. Übers. Campus, Frankfurt a. M. in Vorbereitung); Pierre Bourdieu (Einleitg. zur französ. Neuausg. u. Neuübersetzg. von) N. Elias, La société de cour, Paris 1990; Johan Heilbron, Het ontstaan van de sociologie, Amsterdam 1990 (Übers. »Das Entstehen der Soziologie«, der Gesellschaftstheorien im Umfeld von August Comte).

(27) N. Elias, Das Los der Menschen, Frankfurt a. M. 1987, S. 87 ff., N. Elias, Die Ballade vom Armen Jakob, in: Sinn und Form, 1989, H. 4, S. 759-770 も参照のこと。

(28) N. Elias, Humana Conditio, Frankfurt a. M. 1985; N. Elias, Über die Deutschen, Frankfurt a. M. 1989.

［訳注］

(1) エリアスは一九八二年から八四年までアクラのガーナ大学で教授を勤めた。

(11) 主役の講演者を脇に立たせて、延々一時間も喋ったネークトのこと。マルクスのいう「生産手段」を冒頭において皮肉っている。

（三）ズールカンプ書店の社長。
（四）現ゲーテ・インスティトゥート総裁。
（五）エリアスはナチに追われて、フランス（一九三三年）からイギリス（一九三五年）へ亡命している。
（六）エリアスの母ゾフィーは一九四一年頃アウシュヴィッツで死去。
（七）エリアスは、彼同様イギリスに亡命していたフランクフルトの精神分析医S・H・フックスの「集団療法」で働いたことがある。
（八）ベルリンで出ている緑の党系の日刊紙。

## 訳者あとがき

本稿は Peter Reinhart Gleichmann（執筆当時はハノーバー大学社会学教授。研究分野：社会科学の理論と方法論、歴史学および社会学理論。）の »Wofür habe ich überhaupt gelebt« Norbert Elias 22. 6. 1897 – 1. 8. 1990（Dietz Verlag 出版の雑誌 »Utopie kreativ« Hft. 7, 1991, S. 92～98 所収の論文）の翻訳である。エリアスの著作は今や、日本でも『文明化の過程』を初め多数翻訳されているが、尚その全貌は明かでない。その意味で、ここに訳出された論考は、エリアスの弟子であり、遺稿の編者として知られるグライヒマン氏が、師の死後、個人的な思い出を綴ったもので、エリアスの仕事に対する姿勢、人柄を知る上で貴重なものと思われる。一九九一年秋に当時の人間科学部教授、徳永恂先生を通じて、グライヒマン氏から直接、彼のエリアスについてのエッセー並びに論文三編の翻訳許可を頂いた。これまでに『みすず』三六九号（一九九一年一二月）に「ノルベルト・エリアス――九〇歳の誕生日に寄せて」を、本誌第一三号（一九九二年三月）に「エリアスの歴史社会学的心理学」（共訳）を掲載してきたが、ここにようやくその最後の一編を訳出する機会を得たことを嬉しく思う。尚、この翻訳に際しては、三島憲一先生に懇切丁寧に多大なご教示を頂いた。厚くお礼申し上げます。